第三巻　第一号

武神館伝書

平成七年　二月六日発行

山　やまひこ　彦

平成七年より宗家の武号が寿宗（ひさむね）と名のられました。
寿は高松先生の寿嗣の一字をいただき、宗は宗家の宗、宗家としての決意を表したものです。

一九九五年、平成七年、明けましておめでとうございます。今年私が皆さんを指導するテーマは薙刀と大刀・小刀の捌き方、そして体術との関係です。ここ十数年、世界を廻って武道を指導して私が勘じたことは、私が武道を修業して来た方法は人類学的に学んで来ていたのだなと思うようになったことです。武神館の武道が世界的になればなる程、この感覚が大切であるということが分かるようにやりました。九流派の武道の誕生、そして生きて来た過程、その歴史、その間に色々な思想・哲学・宗教・権力・医学・科学・風俗などの影響があったでしょう。併し、それらの時代々々の変遷を一つ々々人類学的に見ることによって、現在私達が修業している武道の本質の要も自覚されてくるものです。私は一時代、世界を廻りながら医学的分野から武道を分析し、指導した時代がありました。間違った武道の見方、考え方に対し、医学的にここが病んでいると説き、健康な武道とはと導いたわけです。武神館の武道を学ぶ時、こんな見方もしていただきたいものです。

現在の武神館は本当に世界的になって参りました。各々の国や民族によって、地球に時差があるようにタブーがあるものです。武友互いに人と人を尊重し、タブーを犯すことなく、友

交に努め一貫して下さい。拠って武神館道場体術伝書、級から四段までの課程を示す本を出版いたします。九級から一級までは、そして初段は、二段は、三段は、四段は、こんな型、技、心構、つまり心技体の大切さを説きながら書いて行こうと思っております。

この本を出版する前に次のことを知ってもらう必要があります。日本の武道は、古伝では、今日のように弟子入りしたいから「はいどうぞ」と教えたりはいたしませんでした。一つの例を挙げますと、武道を学ぼうと一人の弟子入り志願者が道場にやって来たとします。道場の師匠はすぐに弟子にいたしません。何回かの弟子入り熱意の訪れ、その態度を見て許す、許さずを決定するわけです。そして入門を許されました。併し、入門しても師匠はすぐに武道は教えません。その間、数ヶ月、数年かもわかりません、道場の掃除、先輩の稽古着の洗濯、食事・料理の仕事、使い走りをさせられるのです。それに耐えられる人間性を師匠に認められた時に始めて武道が教えられるのです。

武道の修業もまた大変です。武道家としての心得のない者は破門にされてしまうのです。山脈第二巻第二号に書かれているような道場訓もありますが、また武神館道場の規則もこの辺で知っていただきましょう。

一.　道場に規約により合格した者に限り入門を許可す、即ち、

武道家として正義的忍耐自制の決意一貫出来得る者；
医師の診断書を要す。特に精神的に健康な者で薬物中毒者、精神異常者は入門は許さず；
法的に前歴のない者；
道場およびその他の場所での稽古中の事故については一切、武神館道場には迷惑をかけぬことが出来る者；
武神館の規則を守らず、門人として、一社会人としても恥ずべき行為をなした者など破門に処す；
武神館に入門した者は毎年発行する会員証を必ず持つこと、これは武神館会員の名誉を保つためである。

今から十六年前、ものの見方、考え方と題した一冊、今は秘伝戸隠流忍法と題し出版されたものの中に弟子入りと題し書いたものがあったので、参考に供しておこう。そこで何故私が精神的なことばかり書いていたかが、何かこの号あたりからお解りいただけ始めたのではないかと思います。武道の稽古に入る前の心構えが、一貫するのにいかに大切かということを知っていただく為であり、また武風一貫する時、いかに武道家の心がポイントを占めているかということを知ってもらう為である。

弟子入り

武者にかぎらず、師というものは欠かせない。立派な師につき、一生懸命修業すれば立派な武人になれるが、武道屋についた場合は真の武道を悟ることなどとうていおぼつかない。

昔の弟子入りには、良師を得んとさがしながら武道に入門する者（求道型）と、知らぬまに山などで修業しているうちに師に見出されて入門する者（突然型）とがあったが、いずれの場合も、師はこの人間が武道家としてふさわしいか否かを品定めしたものである、ＥＴＣ。

また昔の弟子入り志願者は、まず薪割り、掃除を義務づけられた。彼らは数年間ひたすら朝から晩まで薪を割り雑巾を動かした。その間、師匠は弟子の武道家としての媒材をじっくり吟味しているわけだ。武道に一貫できる士骨性と素直さをどの程度持っているかを見分けるのである。そして、頃合を見て、

「道場へ参れ、稽古をつけてつかわそう」

という段になる。激しい容赦のない稽古が連日つづけられるうちに、師の有難さ、愛情の深さを知って、真の弟子になってゆくわけである。

現在、私のもとへくる入門希望者は、体が弱く気も弱いから強くなりたいという脆弱型、精神を強くしたいという頭脳型、ただただ武道に強くなりたいという闘争型など、さまざまであるが、いずれも武道への激烈な憧憬を抱いているという点ではムード派である。そんな彼らに対して、私はあけすけにいう。

「精神を鍛えたいんなら宗教でも修業しなさい。武道というものは、殺し屋の最高テクニックを習うものだ。体を強くしたいのか、それなら歩くこと、ボディビルをやること、そして野菜を多く食べることだ。武道なんかに強くなってどうするんだ。武道ではカップはもらえないし、銭にならんよ」

こんなことをいいながら、私は志願者の反応を見ているのだ。せっかく入門させても一貫して修業できる人があまりにも少ないからである。何といわれようと無心に、自分の意にしたがってやりぬくバカが少ないのである。

高松先生は、私のようなバカにつぎのような詩を吟じながら入門を許された。

「天永元年武風有り
　何（これ）　骨法術の達人たり
　勇猛義烈一挙猛獣を倒す
　平常花性竹性の如く
　反敵十万尚恐れず
　誰か武人の志を継がんや
　神州人有り待つこと久し」

己の自慢でも吹聴でもなく、バカになれぬ者は何をしてもだめなものだ。カッコよさだけを追うスタイリストほど、やることが中途半端で、生きざまも不恰好なものだ。

さて、師弟の関係であるが、そこには相互に尊敬の心がなければならない。私の師である高松先生が、私をさして「初見先生」といってくださるのには、はじめ歯痒く、何となく理解しがたかったが、今、ようやく、その相互尊敬に気付き、あらためて頭を垂れる思いである。

とはいえ、師は師であり、弟子は弟子である。態度や礼を失することがあってはならない。私は高松先生によって、生きがい、生命なるものを知ることができた。

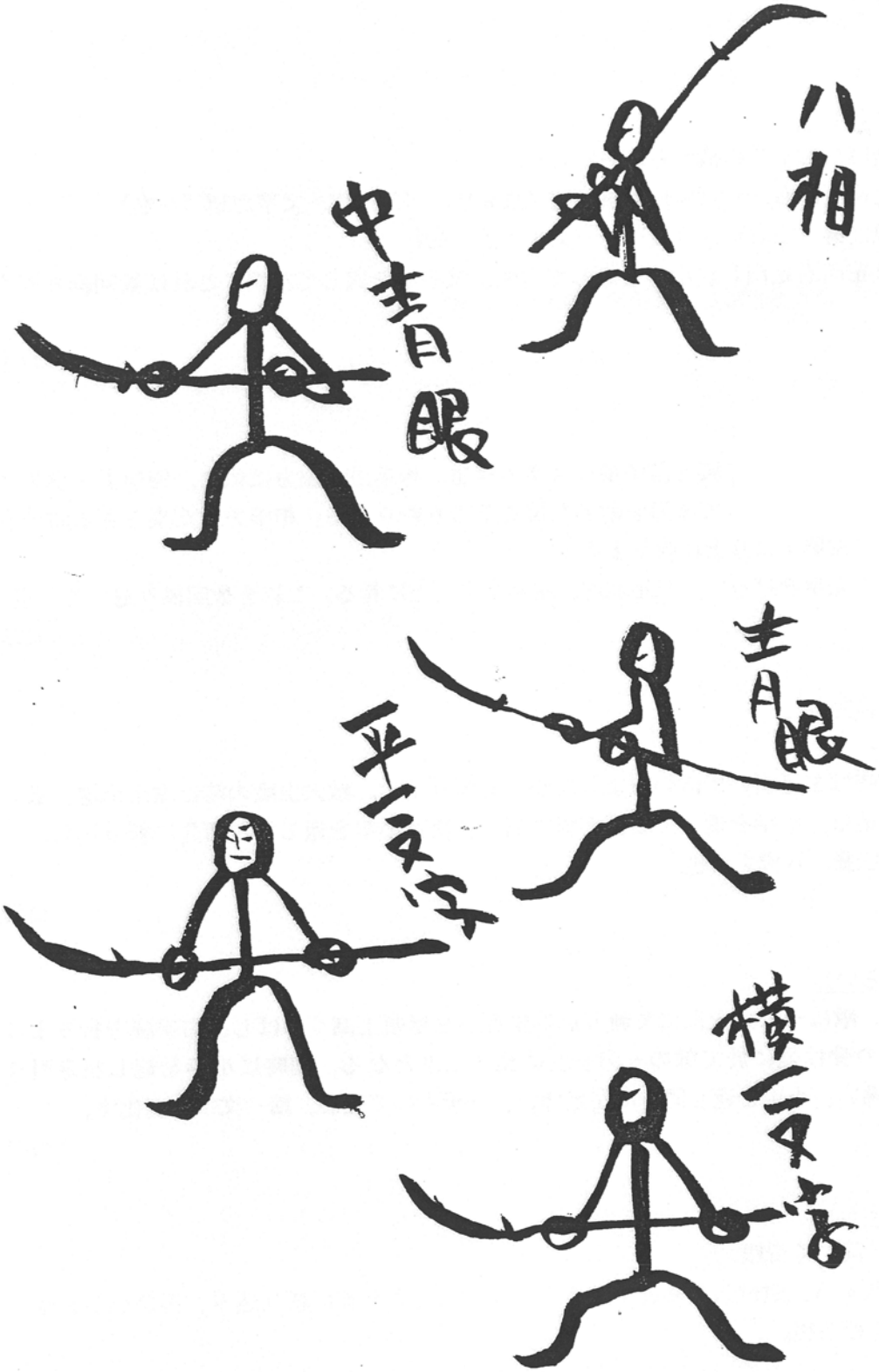
「親子は一世、夫婦は二世、師弟は三世」とはまさに至言である。

薙　刀　術

薙刀の術を稽古する前に薙刀の正確をよく知ることである。ここ二年前より、六尺棒術、槍術を伝授しましたが、これは六尺棒術の特性、槍術の特性、その特術を会得する為のもであり、この特性の延長が薙刀ということになるのです。昨年は槍術と小太刀の各特性を稽古しましたが、この小太刀の術は薙刀の術の時に小太刀的薙刀の術の応用編ということにもなり、薙刀術を大刀の術、一身同体とした薙刀術の術味を知ってもらう為であります。

こう申し上げると一九九三年の棒術の伝授、一九九四年の槍術の伝授、小太刀の伝授、そして一九九五年の薙刀術の伝授は、この三年間、長器に対する相互関係と三術、棒・槍・薙刀の長物を使う場合の心得の基本を伝授したということになるのです。

諸君に長物についてこう解説すれば、長器に対する認識が深くなり広くなることと思います。薙刀術九つの型、これは体術の基本八法に似て、秘薙刀術基本九法と解し会得して下さい。


八相
中青眼
上段
平正眼
横正眼

秘薙刀術型

薙倒（なぎたおし）

この技の構型は左右十字の構から薙倒に入る。

（一）八相之構（左右）、（二）青眼之構（左右）、（三）横一文字之構（左右）

（四）中青眼之構（左右）、（五）平一文字之構（左右）

右構には躰は正面右足出し、小手を返して右胴、又小手を返して左胴、これは数回繰り返すこと也。

口伝

掬上（すくいあげ）

この構は右斜め足を割って腰を落す横一文字の構也。相手方の出方に依る。相手方一歩先に斬り込み来る時は左足引いて薙刀を敵の左脇を下より斬り上る。相手方今だ来らざる時は右足一歩前進して左脇下より上に斬り上る。

同時に相手方の先手を打って、左足前進、右脇下より上に斬る。これを数回繰り返すこと也。

口伝

拔倒（はたきたおし）

八相之構とす。

相手方青眼の時は左足引いて敵の左より左小手を斬り下す。敵大上段の時は右足前進、敵の左脇下に斬り込む。小手を返して右裾を斬り返し、次は小手を返して左肩先に斬り込む。一歩引いて元の位置、八相之構也。

口伝

足拂（あしばらい）

平一文字の構。敵は一刀大上段にて斬り込み来る。左手頭上高くのばし、右手腕を折りまげて受ける。この受け型に於て敵の一刀を右に流すこととなる。同時に小手を返し左足引き、坐して敵右足拂い、小手を返し同時に左足拂い、一歩引いて残心。横一文字に変化す。

口伝

撥倒（はねたおし）

青眼の構。受け同じく青眼。

我れ左に体を転ずる、敵付入らんとす。小手を返し右肩より首に斬り込み、再び小手を返し左肩より斬り下げる也。

口伝

繰出（くりだし）

中青眼の構。敵の大上段に対して青眼にて左足一歩後。尚退ると見せて左側に身を転じ小手を返し敵の左胴に斬り込み、忽ち右側に身を転じ小手を返し右胴に斬り返し、右の如く身体の掛引きに応じ繰出すこと也。

口伝

前後薙（ざんごなぎ）

八相に構える。敵は前後数人也。左より右に斬り返し、忽ち右腕の返し方で右に斬り返すこと。早くすることが薙刀振廻し斬り返しという。この如くして敵中に斬り込む也。

口伝

差違（さしちがい）

平一文字の構にて敵の大上段に対し薙刀横刃として突き、小手を返し裾拂い、再び横刃にして突き、小手を返し裾拂い数回にて敵を倒す。

口伝

飛切（とびきり）

これは八相に構え敵の左胴に斬り込めば其返動を利用して左に飛び、右胴に斬り込めば右に飛ぶ、即ち飛び違い斬ること也。

口伝

平成七年

久法伝授

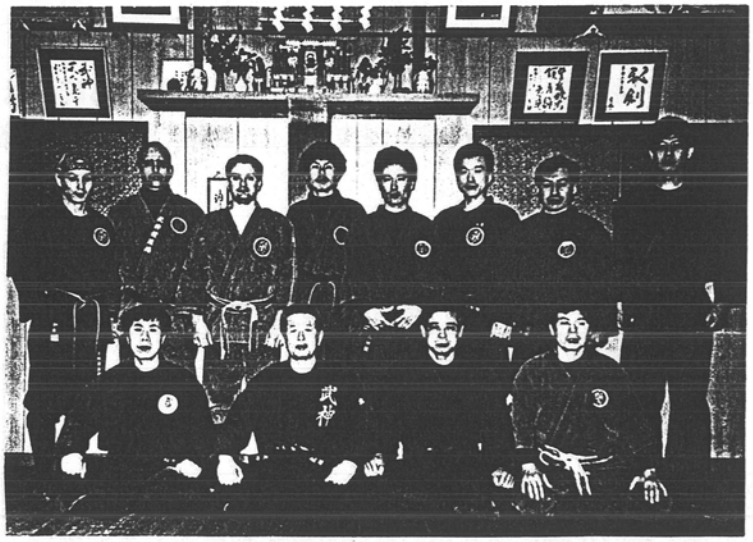
宗家 寿宗（ひさむね）

大小捌、無刀捕、白刃止のビデオ撮影

ペドロ・フレイタス・ゴンザレス
武神館エスパニャ道場　士道師

前夜は初見先生と２時間歩いていました。朝の３時で、次の日私達を待ち伏せている冒険に直面できるように私達の体は自分の意思で布団に向かいました。

数日前に初見先生は私達に「日曜日に新しいビデオを撮影する」と伝えていたのです。ことの成り行きを先取りして、私は先生に「撮影を見学してもよろしいでしょうか？」と尋ねましたが、先生は「考えておこう」との返事でした。何日か経った後、私とパコさんは先生の家の前に立っていることになりました...



大小捌・無刀捕・白刃止のビデオ撮影、出演者の面々
後列二人目ペドロ君、三人目パコ君

朝の９時でしたが、大変めずらしいことは私達が道着を持っていたことです。要するに、私達の役目が変わり、先生は撮影に参加して欲しいと決めたのです。

「おはようございます！　どうぞどうぞ、中へはいっていらっしゃい」と初見先生が家のドアから歓迎してくれました。玄関に靴を置き、ホールまで進んでいくとそこに瀬能先生や大栗先生を初め、日本の師範やその弟子達が何人かいました。

大栗師範が私に「コモ・エスタ・ウステ？」とスペイン語で聞いてきましたので、唖然とし私は「元気です」と日本語で答えました。妙な感じです...

撮影を行なうはずだった染谷道場に行く前に、先生の弟子が二人バッグを持って現れ、床に落しました。埃が沸き上がり、中に何が入っているのかを匂わせました。先生がバッ

グを開けると巻き物が飛び出てきました。私は「神様！」と思い、何千年の歴史が部屋中に溢れたような感じでした。古代美術品を発見した人のように吃驚しました。そういう時、物質だけでは表現できない、そこから発揮されるバイブレーションを感知するに相違ありませんが、私も似たようなものを感じていました。先生はビデオの仕事の基となる巻き物を素早く見せてくれた後、スーツケースを指しながらその中身を指して「これが何千年の歴史に基づいた武神館の武道の事実です。」

ビデオ撮影は１０時に始まりました。私達は先にほかの参加者に挨拶をしたのですが、初見先生を除けば大栗師範や瀬能師範、染谷さん、岩田さん、中太さん、吉田さん、本間さん、長瀬さんでした。そして「ビデオ・クエスト」の社長である小暮さんが来ました。カメラや音響などの装置を一瞬で準備し、染谷道場は瞬く間に小さな撮影所に変貌しました。ただし、ただの撮影ではありませんでした。完全な稽古でした。先生の絶え間ない指示や動き、ほかの人の技などよりさらに撮影現場に辿り着くだけでも本当に障害物競争のようでした：床はケーブルや武器、書類などで埋まっていたのです。面白かったですが...

実は撮影がどういう順序で行われるのか、そして自分達がどの役を果たすのかさえ分からなかったのですが、この謎は大栗師範と瀬能師範が私達を含めてすべての参加者にコピーを配り始めた時すぐに明らかになるところでした。「あっ、これは日本語で書かれている！」と分かりパコさんの方を見たら、二人で笑うしかありませんでした。この書類には技の説明を表している絵とそこに達するための基本的な動きを述べる日本語のテキストがありました。「それじゃ、初見先生の一番大事な教えの一つを適用するしかない」と思いました。「ノー・スィンク」です。私達は各々およそ二つの技を与えられましたが、師範方の助言で早く自分達の使命を解き明かすことができました。問題はありませんでした。基本的な技を行った後先生がそれについて話したり、直したり、アドバイスをくれたり、変えたり、形を壊したりするというシステムでした。これで１２時間にも及んだ撮影が始まったのです。この１２時間の間は初見先生が一番働いていたのです。私達がやっと多大な努力で基本的な技を成し遂げたのに比べて、先生が無数の変化をやったのです。（私は違う技を約２００数えました。）この経験から私はいくつかの結論を引き出しました：

初見先生は私達に常に「考えるな」、「全部忘れる」、「肉体的な力を使うな」、「リラックス」、そして「幸福」と言っていました。先生のこういう教えは実際に使うと単純な概念をはるかに超越するものです。もし稽古や実戦の他ならぬ撮影の間、初見先生が考えたり、思い出したり、力を使ったり、緊張したり、楽しめないほど真面目にやっていたら、この試験に直面することはとても複雑になったと思います。ですから彼の教えは愛と尊敬、喜びを以って受けるべきです。

師匠が私達に語ってくれることは無意味でくだらないことではなく、私達が考える以上に現実に近く深い意味を持っているものなので、注意深く聞くべきです。何よりも武神館の技は限界があると思ってはなりません。常に動いているため無限であり、心で観察しないと攻撃的・防御的な心構えを現している機械的な動きに過ぎません。この地球に住んでいるすべての生き物によりよい世界を創るための己との絶え間ない闘いを表しています。最後に、初見先生の教えや勧告に従い、諸君にこう願いたいと思います：

今読んだことについてあまり考えないでください。すべて忘れてください。肉体的力を使ってこの文章を頭で理解しようとしないでください ー その代わり心で理解してください。そしてリラックスしてください。これを全部実施できたら本当の幸せが見つかり、考える必要もなくなります...

初見先生と歩いて十五日間

ペドロ・フレイタス・ゴンザレス
武神館エスパニャ道場　士道師

三月十日、夜中の十二時半頃、パコさん、フアン・マニュエルさん、カルロスさん、そして私は初見先生の別宅にいました。布団を用意して、巣に飛び込もうとする時でした。その日は少し疲れていました。朝は友達と一緒に明治神宮まで生き、帰りに秋葉原に立ち寄り、その後東京武道館まで行き七時から初見先生と稽古をしました。

布団に片足が入って、もう一本がその後に続こうとするといきなりドアに「トントントン...ハロー？」が聞こえました。「一体この時間に誰だろう？」と少し驚きました。ドアを開けてみるとなんと初見先生とその犬達でした。「歩きませんか？」と先生に確認するように聞かれた時、私達は「はい、先生」と答えました。私は友達のパコさんと一緒に階段を降り、夜の軽い寒さになれようとしました。これで先生との夜間稽古と勉強の旅が始まったのです。その後先生と我々の素晴らしい二週間を過ごしたのですが、その間のことはすべてその日々のことばかりではなく我々の日常生活にあてなければならないものが入っていたので、正しい例を取って気に止めておかなければなりません。

先生は登山で使うような安全革紐で五匹の犬を自分のベルトに結び、六尺棒を支え杖にしていたので私は少し驚きました。先生は余りにも速く歩いていましたので、私は彼が速度を上げて遠くから話すと私が聞くのは彼の声ではなく前回の山彦ではないかと時々思いました。

先生は私達にこれが彼の毎日の訓練であると語ってくれました... 二時間歩き、犬の引合いで自分の体を正しいバランスに保つことを学び、暗い所で見ることを学び、影の使い方を学ぶことなどです。私達の夜間稽古はこれに基づいていたのです。こういうものは単なる肉体の技を超越しています。最初の日にある考えが私を襲いました： 「今日は高松先生の命日です。」自分の中にこれを閉じ込みきれなくて先生に言ったのですが、流石に彼の返事に驚きました： 「そのためにあなた達を探しに行ったのです。」

心の中で忘れることのできない、色々な教えの籠った二週間がこのように過ぎて行きました。時には歩いている最中に先生が技を見せてくれ、時にはより強烈になり、最終的に野

田市のお寺で犬を遊びに任せ自分達で稽古するようになりました。

私がこの体験から得て心の中に今でも持っている一つの教えは、夜間稽古の間初見先生が何回も言った「見えない時はフィーリングを使うしかない」ということです。私の意見では、これは人生の中で問題に向かっていると、それを見ようとし、頭で論理的に解決しようとし、直感やフィーリングを忘れてしまうということをも表していると思います。

山　彦

無刀捕、真剣白刃止の二本は一日で撮り上げたものですが、この二本の意図する所は虚実転換など剣法の動静陰陽の神髄を発見出来るのだということです。従って、大刀、小刀を帯びる者はこの二本の真理を基礎とし会得すべき過程にあるのです。

忍術におけるマーフィーの法則

― 今後大会を主催する方へ ―

アルノー・クゼルグ（十段）

アルノー・クゼルグ
十段

パリ大会は１９９３年７月２１～２３日に行われましたが、私がそれについて積極的に考えられるようになったのは極最近です。何が起こったのか、何が良かったのか、何が良くなかったのか、まとめるのに一年掛かりました。この文章が今後大会を主催する方々のためになることを心から願うとともに、今までの大会を主催した方々はこれを読んでいる間自分の経験を思い出し、笑ってくれると思います。

一つの例を挙げると、大会が終った後の３ヶ月、私はパソコンに触れませんでした。触れられなかったのです。このパソコンは大きな指のように、私を指してこの狂気の時期を思い出させたからなのです。

私達（武神館道場フランス）がパリで大会を主催すると決めたのは、ポルトガル大会でのことでした。

これを決めてからは楽ではないと分かっていたのですが、４つの利点がありました：

1） 私はクビになったばかりでした（最近よく聞く話しですが）。それでゆっくり考える余裕がありました。

2） それまでの私の仕事はコンピュータ・ソフト業でプロジェクト管理ソフトを売ることでした。そのためにはプロジェクトを運営することが分かっていなければなりませんが、大会こそ本当のプロジェクトです。

3） 私はまだ前の会社との連絡があり、そこのコンピュータを使っていいことになっていました。

4） １９８７年のロンドン大会以来、私はいくつもの大会に参加し、大会の運営を勉強する機会に恵まれました。

こういうイベントのキーワードは「運営」です。多くの大会主催者は大会をただ参加者の多いセミナーのように考えています。全く違います。これが過去の多くの大会が赤字になった理由です。もう一つのキーワードは「お金」です！初見先生にあなたの国に来ていただけることは確かに大きな名誉ではありますが、物質的に物事を完璧に運営した（あるいはしようとした）ことの成果と考えなければなりません。仕事の９割をずっと前にやっておくことが肝心です。

大会の主催を引き受けたら、それでお金や個人的な名誉が手に入ると思ってはなりません。いつもよりもたくさん働かなければならない、そして少なくと１年前から準備しあらゆる可能性を考えておかなければならないと思ったほうが賢明です。

パリ大会の場合は１９９２年６月に準備を始めました。毎月大会の会議を行ないました。これらの会議には一つの目的が有りました： 大会運営におけるすべての課題を識別し、余裕を持ったスケジュールを組むことでした。夢を見てはなりません： 締切に間に合うことはありません。スケジュールは変えられるために作られるようなものです。

１９９３年５月から会議は週１回のペースになりました。各会議で今までしたことの結果、そしてこれからまだしなければならないことを発表しなければなりませんでした。７月１日から宗家の帰国３日後まで毎日会議を行ないました。大会は宗家の帰国で終りません。仕事をいくつかのチームに分けました（空港、定期往復便、ホテル１、ホテル２、輸送機関、体育館、受付、食べ物、パーティなど）。どのチームも詳しいスケジュールを持ち、どのメンバーも自分の毎時の課題およびほかのチームやメンバーがその時やっていることを暗記しておかなければなりませんでした。

フランス大会で士道師ミーティング

大会中（金・土・日）は違いました。毎日２回会議を行ないました。その一つはその日の稽古が終わり、夜中の零時頃でした。この「虚空」には二つの目的がありました。その日に起こったことについて冗談を言い合うことでストレスを解消すること、そして良かったこと・良くなかったことを確認することでした。良かったことは誉めましたが、良くなかったことは同じ原因が同じ結果を生まないように変えました。このシステムは案外うまく行きました。

ここで私の秘密兵器を紹介したいと思います： 私はとてもいいチームに恵まれました。大会はある個人が一人でなせるものではありません。どうしてもアシスタントが必要です。自分の経験からいうと、そのアシスタント達は自分の道場の人でなければなりません： なぜなら、会社と同様に、ほとんど毎日（稽古の間だけでも）会ったり話したりするからです。

大会を主催することにより弟子との関係はかなり変わってきます。私がこのイベントから最初に学んだのは、我々は皆人間であるということです。

ほかの門人に対して「武神館家族の態度で接する」とよく言われています。それを試すのに大会が最良の手段です。何人かの弟子を失うでしょうが、その代わりにとてもいい友達を得ます。このマネージャー的視点を終えるために、もう一つ指摘したいと思います。大会をやりたいと思ったら、かなり前以って考えなければなりません。そして宗家の許可をいただけたら、彼の決めたルール通りにやるほどのプロにならなければなりません。なぜなら、マーフィーの法則の通りです：「狂う可能性のある予定はすべて必ず狂う！」

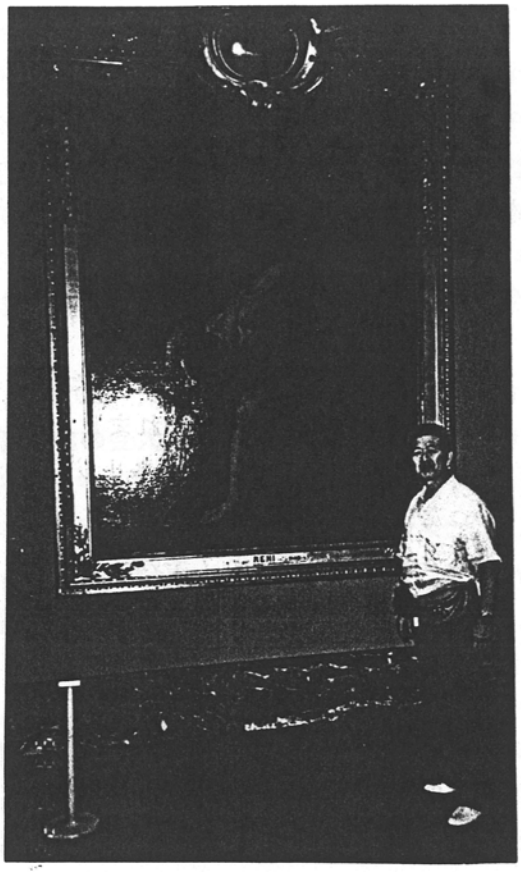
宗家を迎えに飛行場に行くと、どれだけのお金が投資されているのか、本当に来るだろうか、もしも来なかったらどうやってホテル・食べ物・稽古場など払えるだろうかと、悩まずにはいられません。そして突然に彼は目の前にいます。天国にいるような気分になりますが、地獄も遠くはありません...

パリ大会では予定が狂う時もあり、難しい時もありました。宗家のチケットはその一例です。前以って予約し支払いを済ませたのですが、（マーフィーの法則を避けるために）日本に無事に届くことを保証するために国際クーリエ（急使）で送ることにしました。一周間ずっとＤＨＬの東京事務所に電話していたのですが、一周間も「初見氏は不在でした」と言われ続けました。宗家がチケットを受け取ったのは出発の３日前です。

凱旋門前にて

宗家ご訪問の文化的面に関しては、私は彼が見ておいたほうがいいと思ったものを考えた結果、２ヶ月いても全部は回れないと分かりました。宗家が何を見たいのかを本人に聞くのが一番いいです。大会の前日（木曜日）に有名なルーブル美術館に行きました。暖かい日でした。大会参加者の受付も始まり、私はホテルで行われていることが気になり、すべて無事に進んでいるかどうかをチェックするために早く戻りたかったのです。宗家が私の心配を察したかもしれません。とにかく史上一番速いルーブル・ツアーを遂げ、私が思ったよりも遥かに早い時間にホテルに戻っていました。宗家と数日間一緒に過ごすチャンスがあると、こういうことは自然に起こるように思えてきます。まるで宗家が一緒にいると世の中はもっと生きやすくなるようです。

セミナーの２日目に一つ逸話があります。私はその前夜プレッシャーのためかなり疲れていたのです。必ず宗家と一緒に朝食を取れるように、私はヒルトンの受付にモーニング・コールをお願いしました。「はい、畏まりました、明日の７時にお目覚めの電話を入れます。」次の朝８時に目がさめました。８時１５分に会う約束でしたので、時間通りに起こしてくれない自称「国際ハイクラス・ホテル」を罵りました。目が半分しか覚めていない状態でちょっと遅れて朝食に着きました。自分の遅刻を説明しようとする前に宗家に聞かれました：「アルノーさん、今朝早くホテルに起こされたのですが、何故か分かりますか？」 私は地球が突然爆発するのを感じました。私は受付の人に宗家の部屋番号を伝えたのでした！



ルーブル美術館にて

毎晩数時間しか眠ることが出来なく、非常に疲れていました。大会のすべてをコンピュータで管理し、皆ノートブック・パソコンを使っていたのです。ある日もう一つのホテルで私の弟子であるギヨームさんがあまりにも遅くまで仕事をして、朝までベッドに座ったまま、コンピュータの画面を枕に眠っていたと聞きました。

大会を主催すると人間の本質が露になります。受付の初日は何人の生徒がチームの責任者を手伝ってくれるのか分からなかったので、私は人が足りないのではないかと恐れていました。しかし最後のパーティでは私の生徒が２４人も手伝い、大会を成功させたことを発見しました。その中には３日間の大会期間中、午後１回しか稽古出来なかった人もいました！

肝心なのは時間までに物事を済ませることです。情報をもらっていない人があなたの大会に来ると期待してはいけません。ダイレクト・メールは少なくとも４ヶ月前に発送しなければなりません。大会の主催者として忘れてならないのは、宗家を除けば大会が主催されるということを知っている人は世界にあなた一人だということです！ 自分の国の道場も含めてです！ 道場長の中には自分の名誉の為にやっていると思い、弟子達を大会に行かせない人さえいます。そして大会と同じ日にわざとセミナーを企画する人もいます。前も書きましたが、大会では人間の本質が露に出てきます。パリ大会に参加したフランス人の５０％以上が私の弟子でした。私がフランスで只一人のインストラクターであるとは驚きです...

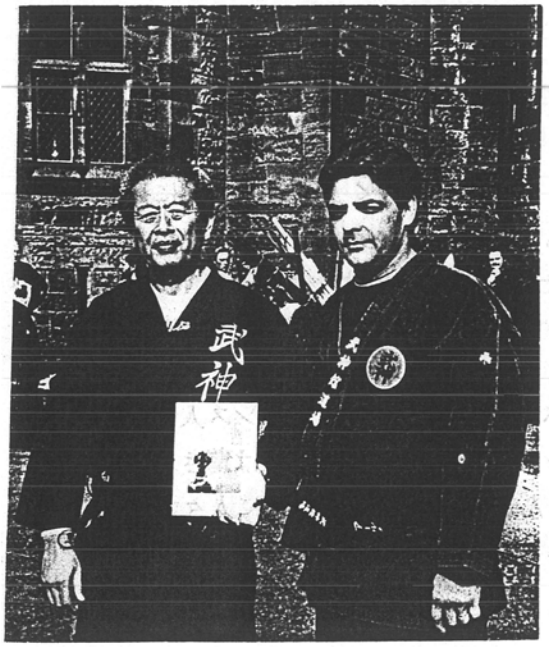
前以って払わなければならないものがたくさんあります。締切までに人々が申し込むということは期待できません。大会の３週間前は１７万フラン（約３００万円）の赤字でした。繰返します、あなたは一人です。

最後にまた別の逸話です。大会の一週間前にビデオ撮影をするはずであった会社から電話が掛かってきて、「申し訳ないが大きい契約が突然に入ってきたからできない」ということでした。そこで私は弟子の一人に頼みました。結構よくやってくれました。しかし大会の２週間後、彼はフランスを離れカナダまで行き、最近までそこに住んでいました。彼はビデオ・テープを持って行きましたが、住所はどこにも残していきませんでした！（私はマーフィーが嫌いです。）彼は４月にテープと共にカナダから帰ってきました：大会の１０ヶ月後です（私はマーフィーが嫌いです）。やっと大会の正式ビデオが出来ました。

パリ大会について最後に言いたいのは、私の意見では結構な成功だったということです。宗家は初めてフランスを訪れましたが、大会の参加者は皆その３日間の稽古および友情を楽しんだと思います。スヴェネリック・ボグサターさんが私にこう言いました：「私は楽しかったです。ピーター・キングさんが主催した８７年のロンドン大会を思い出しました。」私もそう思います。８７年のロンドン大会はヨーロッパで初めての大会でした。私が一番感心したのは、様々な国の人が一緒に稽古し、武神館道場の特別な精神を伴にしているのが見えたことです。

パリ大会には１９ヶ国の人が参加しました。そのお蔭で最近の大会にちょっと欠けていた国際的な味が出ていたと思います。近い将来、宗家が年に一度しかヨーロッパに来ないと決めたことは、そのためにとてもいいと思います。これは国と国の間の武神館のフィーリングを強化するので、母国の国境を越えた友情を深めることが容易くなるに違いありません。

最後になりますが、大会が終ってからその運営を手伝ってくれた弟子達と皆でパーティをやりました。その中の一人が「もうやり方が分かったから、来年もやっていいですか？」と聞いてきました。私がこの前日本に行った時も、宗家に１９９６年にもう一度パリで大会をやってくださいと言われました。私はこうとしか答えられません：「先生、私達はパリ大会９６年に向かい、準備万端です！」



声を聞いた
「笑って、幸福でいよ
この世により酷いことがある」
我は笑って、幸福でいた
そして確かにより酷くなった！

大会を主催する方々に何らかの情報が必要であれば、私は質問に喜んで応じます。しかし、城雲図・勉さんは色々なことが分かり、宗家から速い返事が必要な時にとても役立ちますので、彼の助けを求めると一番いいと思います。

ミッテラン大統領からの写真（サイン入り）を手渡すアルノー・クゼルグ（十段）、チェスター（UK）にて

友情と調和

― フランクフルト・アム・マイン大会 ―

シュテッフェン・フレーリッヒ
士道師・８段、ドイツ武神館

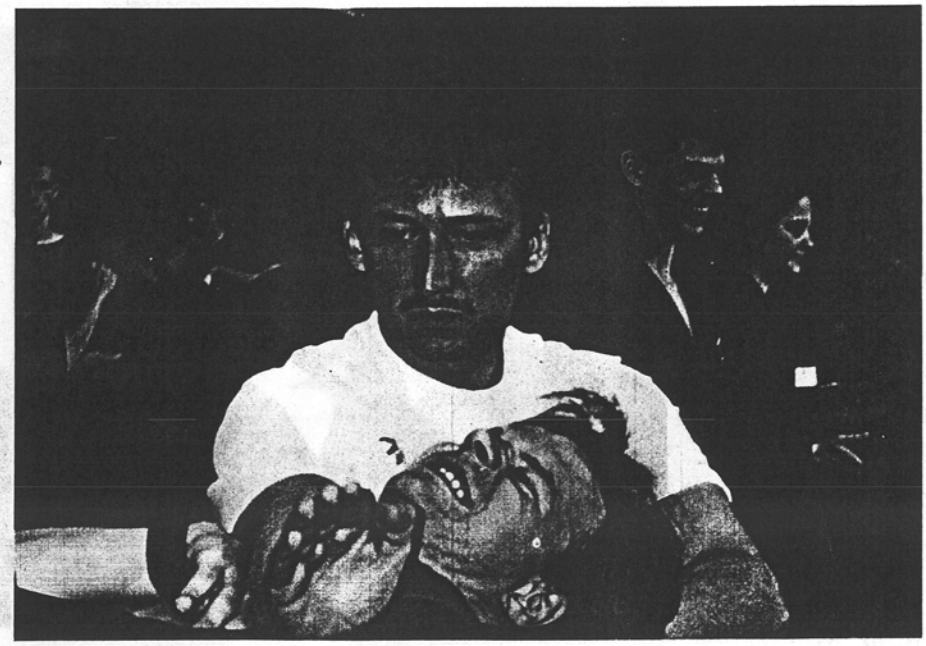
誰でも、人生の中で自分が歩いている道は正しいのか、そしてどこに向いているのか、自分に問う時がある。何か積極的なことを認識し、また他へ伝えていく機会に恵まれたら、自分一人で独占するべきではない。私は人生で一番大事なのは正しい意識を認識すること、そしてそれを自分にも他人にも公開することであると思っている。

２０年前に私が武道を始めた頃、これは私が大事であると思っていた要因の中の一つに過ぎなかった。しかし様々な武道を修業しているうちに、存在の本当の価値はどこでさがすべきなのかを益々認識するようになった。

その結果、１９８７年に初見良昭宗家と個人的に知り合うことができ、彼が私の将来の転轍器を変えた。彼とその弟子との直接な連絡のお蔭で、私はヨーロッパでも日本でもそれまで不可能にみえた可能性にいろいろと出会えた。

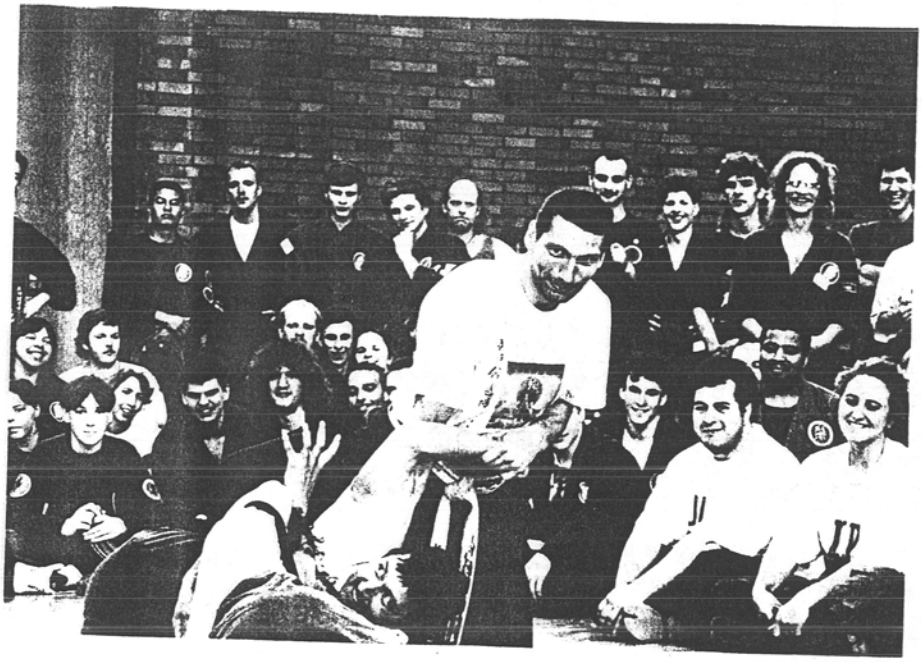
困惑や疎外、無気力の時代に、自分の人生を成長した伝統的・総合的哲学に基づき導くのはとても価値がある。私は自分に合った哲学を忍法で見つけたのでる。

多くの人が自分をより効率よく、より基本的に見つめることなどには、宗家の武神館は決定的である。これは一緒に勉強することと同様に、国境を越えた友情関係や平和、調和を生み出す。



帯術　シュテッフェン・フレーリッヒ君

そのため、ドイツ中のインストラクターや弟子のために、その支持を得



アルミン・デールフラー君

て、ドイツのための大会を企画し主催できるのは私の何年も前からの熱烈な願いであった。

大会はすでに１９９４年５月にフランクフルト・アム・マインで行われた。私はこのイベントが終った後、山脈の中で自分の印象について自由に書くことを決めていた。

私が大会に参加したのは今回で９回目になったが、それについてはもうかなり分かっているだろうと思っていた。

明るさで輝いていた真剣型や分銅、槍術、小太刀の稽古だけではなく、私の意識に思考の新しい次元を与えたのが宗家と一緒に過ごした時間と彼とのいくつもの個人的で友好的な、親しいともいえるような会話であった。

どの人間でも、自分に何がいいのか、自分は何に達したいのかという固有のイメージがある。私は個人的に武道のやり方全般も勉強も、すべて先ず頭の中で細かく表さなければならないということを完全に認識し分かった。あらゆる結果も含めてである。即ち、最終的に成功せずに制限して

帯術二人捕　スヴェネリック　十段

しまうような動きの過程を勉強することのみならず、むしろ行動と考えの調和を総合的に会得することである。これはいつか我々を望みの空虚に導き、自由に抑制されない行動ができ、我々の環境の中でより自発的に動けるようになる。

私はこの道を体験したいすべての門人の相談に乗るつもりである。

大会で起こったすべてのことが私達にこういう印象を与えた － すべてがいい星の下にあるということで、それでよかったのである。ただし、この「いい星」は我々の積極的な考えの投出に過ぎなかったかもしれない ... これについては各個人が自分で考えをきめるべきであろう。

私は大会の委員会（その構成は私のほかに妻のザビーネとアルミン・デールフラー士道師）の中で新しく得たすべての体験やイベントの主催がうまく行ったということについてとても嬉しく思っている。

私達が皆初見良昭宗家とその教えに個人的に出会う、または知り合うことができるのは本当にラッキーであるが、そこから何をするのかは各個人による。

多くの貴重な経験は先ず自分で個人的に処理しなければならないので、大会後に自分の気持ちについて書くという企ては以上の数行に限らなければならない。世界中を旅した中で私は初見良昭宗家と比較できるような人とは一度も会っていない。彼を尊敬し、彼から学ぼう。

ここで奥様の鞠子さんおよび友好的な師範、野口幸雄さんにも感謝の意を表したい。

私達が山脈という媒体を通し通信し、彼の教えを日本の本部道場から直接に受けることが宗家の願いである。

この雑誌が世界中でそれに相応しい意味を持てるように、武神館のすべての門人がこの仕事で共に働くよう呼び掛けたい。

友情を込めて、
シュテッフェン・フレーリッヒ

山　彦

次は宗家がフランクフルト大会から帰国後、新聞に書いた随想である:

「ナイトの称号を戴いて」

武神館戸隠流三十四代宗家　初見 良昭

ライン川の大支流マイン川河畔の街、フランクフルトは、ドイツのほぼ中央に位置する経済都市、銀行の街である。それ故にか、ダストラントは、産業に汚染されることなく緑と花が美しい香りを放っている。武神館道場の大会に集まった十八ヶ国の友をのせる客船が、マイン河を行く両岸は第二次世界大戦で破壊され、つわものどもの夢の跡には、枯れた現実の映像が強く写し出されている。併し、旅情というものは、魔物である。七人の処女が唄うローレライがそこにあるからである。突然「宗家ここにいらして下さい!!」という声に、我にかえると、そこにはナイトの称号を贈る儀式があった。肩に剣をいただき!! 騎士になった私は、ツルゲーネツがいう、人間にはハムレット型とドンキホーテ型の二つの型があるが、俺は、そうここで俺といってはいけないのだ「まろは」といっても通じない、僕はで行こう!! 騎士道物語を読みすぎて妄想の世界に生きたドンキホーテ型と知りつつ、それを選んだ時、同行した野口君もプレゼントされた楯と斧を片手に「僕はサンチョ・パンチャスだ!!」と笑う。野田市の囲りにも船が走ると聞いている。セーヌ河を行き、テームズ河を行き、川はば一四五キロのラプラタ河を行き、ライン河を行った私の脳裏には、江戸川と利根川の四季の自然の香りだけが何か美しく見えてくる。国際化、国際価と叫ぶ倭の国、そこに住む人々はそれは何であるかわからない。一九八六年、ゴーマンリポートがアメリカで発表された世界大学のランキングはパリ大学が一位で、東大が何と六十七位だとのことである。セーヌ河が一番か？ 江戸川は、利根川は、とまれ、私は常々頭脳での人間関係は高く評価していない、東大六十七位にはコンプレックスを感じていない、人間関係、国際化で一番大事なことは心、おもいやりが大切である。

（人類科学博士、哲学博士ＵＳＡ）

武神館フランクフルト道場にて
左からシュテッフェン・フレーリッヒ君、宗家、
アルミン・デールフラー君

太陽の下でのセミナー

― 武神館ヨーロッパ四天王、グラン・カナリア大会 ―

エリアス・クシュヴァッツキー
士道師
ノールウェイ

山脈誌上で大会についての文章をいろいろ読んでいると、自分で書くという気は殆どなくなってしまいますが、先生に依頼を受けた以上ベストを尽くします。

私が先生に勧められた課題は、１９９４年6月２４～２６日グラン・カナリア島で行われた大会です。この大会はペドロ・フレイタスさんが企画し、スヴェネリック・ボグサターさん、ピーター・キングさん、アルノー・クゼルグさんも招待されました。この４人の師範がいると、いい大会にならないはずはありません。

ヨーロッパ四天王
左からピーター・キング十段（イギリス）
スヴェネリック・ボグサター十段（スウェーデン）
アルノー・クゼルグ十段（フランス）
ペドロ・フレイタス十段（スペイン）

金曜日はペドロさんの道場で黒帯の稽古があり、その後の２日間は外で気温３５度まで上がる日光の中で稽古した。蔭を与えてくれる木も数本ありましたが、大体冷たい水の御蔭で最後まで続けられたような感じでした。

私達は数日前にグラン・カナリア島に来ていましたので、すでに日焼けしていました。スペイン人はなぜ握手してくれないのでしょう？ その代わり、３日間で何百人ものスペイン人が喜びで肩を叩いてくれる、痛い思いを味わいました。

大会の一番いいところは、以前大会で知り合った人達と再会できることです（そしてまた新たな友達を作ることです）。そのため、空気は幸福やいい思い出で一杯になります。そのために大会に行くのかもしれません。

大会はいつも何か不思議な力を持っているように思えてきます。技や動きをたくさん教えていただくのですが、家に帰る頃にはもう殆ど忘れています。それでもたくさん学んだという気がします。１９８７年のロンドンの大会に初めて参加し、このことを感じてとても当惑しました。

殆ど何も覚えていないのに、３日間の大会の後自分の体術がより開放されていると感じるのはなぜだろうと思いました。

心の中が開いていると、何か精神的な「パワー」を与えたり、貰ったりすると思います。これは空気に漂っている大会の良い特性から来るものであると思います。人々が修業を続けるということも、このフィーリングが原因かもしれません。

このフィーリングは大会の値段などと比べ物になりません。

私がこの大会に参加したのもその為です。私達がヨーロッパ中から来て、大して重用でないとも思われるかもしれない大会に集まることを見たら、スペイン人達はどう思ったのでしょう？

でも私は重要でないとは思っていません。こういう大会でも、私は家に帰るとき同じフィーリングを持っています。それが大切です。これからも世界中旅を必ず続けるつもりです。

不思議な治療家

城雲図・勉

宗家の近くにいると不思議なことが次から次へと起こる。自分で経験しないと懐疑的に思うのは仕方のないことだし、実際にその場にいた人も解釈がよく異なったりするが、興味深いということは間違いない。ただし、人に関して言えば不思議なことが起こった本人しか正確なことが分からない。その人から直接に聞いた人でも、他へ伝えるときは魯魚亥豕のように止むを得ず話しを飾ったり、大袈裟にしたりする。だから自分に起こったことを自分の言葉でここで書きたいと思った。

九十年一月のある日、私は仕事などで疲れて寝込んだ。コーヒーだけを栄養にして三日間徹夜し、その上、薄着のまま東京の寒い夜を何時間も（都心の仕事場から野田まで往復し、三鷹の共同アパートまで帰る目的で）バイクで走っていた。少し寝たら疲れが取れるだろうと思った。気分が悪かったが、最初は酷い風邪としか思っていなかったので医者に相談したりすることもしなかった。しかし病状が悪化した時「こりゃやばい」と思い一つの病院の外来に行き、そこから大学病院の外来に移され、最終的に入院を勧められた。その時はもう食べることができなくて（すぐ吐き戻す）、歩くことも綿の上を歩いているように非常に難しく、顔の半分が痺れ（話すことも難しい）、そして何より怖かったのは周りのものがすべて二重に見えたことである。

大学病院の先生と診断の時、彼は私に「あなたは多分多発性硬化症でしょう」といった。私は「多発性硬化症」なんてまったく分からないから、彼は英語で「ＭＳ」（マルチプル・スクレローシス）といってくれた。はっきりいって、その言葉を聞いたとき私は「死ぬ」と思った。「段々と体がぼろになって、車椅子、病院、ホスピス、火葬場」と思った。「しまったな。今回はちょっとやりすぎたんだな」と思った。

私もそうであったように、ＭＳのことがよく分からない人が多いと思う。簡単に説明すると、神経の回りのカバーのようなものが何か不明なものにやられ、ショートする。ある程度は治るが傷が残り、伝達が劣等する。これは徐々に体中に発生し、足・口・眼などが動かなくなったりして、最終的に死ぬ。ストレスにも大きく起因していると思われているが、結局は原因不明、治療不可能な難病である。罹ってからの平均寿命は二十年。

大学病院のベッドが開くのを待っている間、武神館の友達にお願いした：「宗家の稽古にいくなら、彼に状況をちょっと伝えてくれないか？ 俺は何も期待していないが、以前宗家が人を治したという噂を聞いているから、もしも何かやってくれるならとにかく損することはないだろう。よろしく。」 その友達が宗家に会ったのは金曜日の夕方（当時は柏道場）だった。土曜日の朝に眼が開いたら物が二重に見えるという病状は殆どなくなっていた。（後で宗家から聞いたが、その時はまだ御札を書いていなかったらしい。念力だろうか？）

数日後にベッドが開いて入院したのであるが、困ったことに病状はもう薄れて感知しにくい。核磁気共鳴映像法（ＭＲＩ）など、あらゆる装置を使って検査した結果やはり最初の診断は間違っていなかったことが分かったが、幸運にも早くも軽快したらしい。

宗家は私の「命の恩人」であるなどと言うのは簡単だが、単純すぎると同時に宗家に対してアンフェアだと思う。まず、ＭＳは軽快と再発の繰り返しで進む病なので、私が今病状無しであるということも将来また再発が起こるかもしれないということも矛盾するものではない。もし将来いつか再発が起きるなら、その時宗家の治療が不完全だったとか、そんな出鱈目なことは言えない。宗家は好意で助けようとしてくれたので、彼に責任を押し付けるようなことはしたくない。

もう一つは私は本当に宗家の御蔭で治ったかどうかという疑問点である。私にも分からない。たまたまＭＳがちょうど軽快に向かっているときに、彼の助けを求めただけかもしれない。あるいは何か不思議な力が私を助けてくれたのかもしれない。でも私はどちらの説も好きではない。宗家がいつも道場の中で、大会の中で説いている武道の教えは（私の解釈では）生き延びる方法、自然に生きる方法、人生を楽しくする方法であると思う。何でもそうだが、一種のショックがないとものの真価に気付かない。私は過去想像もできなかった難病で倒れたからこそ武神館の教えの価値に気付き、人生を考え直した。よりバランスの整った人生にするために、都会から田舎に戻り、仕事を自宅からできるようにし、結婚し子供も作った。今も病気の再発がなく、幸せな人生を送っているということは私にとって「宗家の治療」の充分な証拠である。

宗家が山脈四号で書いたように、私もこの辛い経験に感謝しなければならない。

山　彦

ここで私がお答えしなくてはいけないことは、私は超能力者でも、霊能力者でもないということです。普通の一市民であり、普通の人間であるということです。私の見た高松先生は素晴らしい超能力者であり、霊能者でした。例えば、先生は私の家を一度も尋ねられないのに、家の間取りをかいて「ここに初見はんが立って何か考えていましたな！」というような便りをいただきました。その時の私の状態はその通りでした。また、高松先生の超人的な行為を沢山伺ったことがあります。併し、高松先生はよく言われました。仙道の名人が山に籠っており、山に登ってくる人間が何人か、男か女か、それすらも分かるようになったのですが、それは社会的に良いことではないと、彼はその術を捨てたというお話しを聞いたことがあります。現代は情報化、レーダーの時代などといわれていますが、何か考えさせられることがあります。高松先生は「超能力よりも人間業（わざ）通でおまへん、真心やで」と語られました。私も武風一貫して今真心のパワーの大切さを感じる昨今です。

アトランタで五段になりました

拝啓

残暑厳しい折、いかがお過ごしですか。
先日は免状を送っていただきありがとうございました。遅くなりましたが、悩みながら自分なりに随想を書いてみました。初見先生の教えられている武道は実体がないだけに、文章という平面の世界での伝達に大変とまどってしまいました。

文章力にあまり自信がありませんが、御一読下さい。

九月に入ってから名古屋では、また夏の熱さがぶりかえしております。お体にだけは十分お気をつけて下さい。

奥様によろしくお伝え下さい。

敬具
上原 宏之

三回の世界大会を振り返って

上原 宏之

アメリカはアトランタ。世界的に有名なニュース・ブロードキャスト、ＣＮＮに隣接する高級ホテル、オムニの一室。中では五段のテストが行われていた。

次から次へと受かっていく中、再び落ちたらどうしようという気持ちが脳裏をよぎるが、その反面、一度東京で落ちていたので開き直ってもいた。

五段のテストを受けた方ならみんなわかると思うが、このテスト、本当に「怖い」。しかしこの恐怖に対し、技をもってよける事は不可能だ。いたづらに逃げ出さずに立ち向かう（？）勇気を持ち、後は運を天にまかすしかなかった。何はともあれ私の番が来た時、物事にこだわるのはやめた。それから後の事は何も覚えていないし、特になにもしていない。何かに動かされ、後ろから振りかざされた剣をよけていた。何の実感もない私は、また落ちたかと思い込んでいたのだが、宗家の「よし」という声とそれに続くみんなの拍手に、何もしてないのに五段を受かり、何か得をした気分だった。バードさん、ドロンさん、野口先生、宗家から「よかった」といわれても茫然としていた。このテストは端から見るのとまったく違い、神がかり的な奥深いものである。

アトランタに到つ前、間中先生から「黒衣に鳥を繡い、白紙に鷺を描く」という詩を教わった。未だに本当に受かったのか、自分ではさっぱりわからないが、この詩のフィーリングを信じ、自分の自信につなげていきたい。アトランタの大会は私にとっては三回目の大会となったが、これら ーイスラエル、フランス、アメリカー の大会を通し感じた事は多い。宗家の動きを見ていると、蹴る時でも、拳をかわす時でも、いつも足が吸盤のように地面にはりつき、更に大樹の如くどっしりしてる。

五段に合格してから、物の見方が変わった気がする。それまで宗家のテクニックをあくまで平面の世界でとらえていたのだが、五段に受かってからはどんな技でも空間的な世界でとらえられるようになったと思うからだ。しかし、平面でのとらえ方と空間でのそれには、ほんの小さな事に気がつけば、それほど大きな違いはないように思う。そのほんの小さな事に気づくまでが、四段までのレベルだったのだと受かった今つくづく思う。我々には欲があるだけに、その小さな事に気づくまで何年も時間を費やさねばならないのであろう。私がとらえられるようになった空間は無限であり、無の世界だ。平面のように単純に点と線の世界とは違うので、これからの稽古がとんでもない世界へ行く気がする。これからが本当のスタートである。光がまったく見えず、暗闇に閉ざされているが、勇気を持って歩いて行きたい。

しかし、前回のアメリカの大会で、私は大きなステージでＶＴＲ撮影の為のスポットライトをこうこうと浴びながら、かつ６００を超す青い目が見つめる中で技を披露した時、またもや「上手くやろう」と余計な事を考えてしまった。言葉ではわかっていても、体で本当に理解はしていないのだ。

話しが少しそれるが、三回の大会に共通して感じた事、人の温かさについて少しふれたい。言葉が通じにくいのに、みんな一生懸命、訳のわからない外国語をわかろうとしてくれる。私の拙い英語を理解しようとしてくれるのだ。言葉以上に心が必要な事を痛感した。また、更に各々の国にある国民性のようなものがそれぞれのセミナーのあらゆる所にでているような気がして、私にはとても興味深かった。日本で何千年の歴史を刻む我々の武道も既に日本を離れ、各々の国でその歴史を刻んでいるのだ。

名古屋に移り住んで三年が経つが、それより以前東京にいた時はほとんど毎日稽古できる環境にあった。私は宗家の側にいられた時、なんという時間の無駄をしていたのかと強烈に反省している。あたりまえにあることに感謝の念を忘れ、あたりまえに稽古に参加し、あたりまえに家へ帰る。離れてみて初めて今まで見えなかった事が後悔の念と共に見え始めた。まだ私は一年に五～六回は東京へ行ける距離だから偉そうな事は言えない。しかし、世界に散らばる武友は一年に一回宗家に逢えればいい方だろう。

「月影の照らさぬ里はなかれども、眺むる人の心にぞ住む」という詩はこういうフィーリングを我々に教えてくれているのかもしれない。

山　彦

上原君の原稿と便りをいただいた時、私は便りも入れて紹介すべきだと思いあえて掲載することにしました。日本人の思考は平面的であるという人がいます。例えば、舞台の幕にしても横に平面を走らせ幕開けをします。しかし、外国では幕は空間に巻き上げられて行くという立型思考の傾向が強いのです。こんな所からも縦（ヨーロッパ型）・横（日本型）の十型が友交の結印となるのでしょう。上原君の文中「言葉以上に心が必要な事を痛感した！」とありますが、これはとても大切なことです。武道を伝達する者にとって心がなかったら、心があって初めて縦型・水平型が結ばれ、十型が相互プラスの現象を誕生させるのです。

オランダのマリエットさんからのお便り

日本に行ったときにフランクフルト大会で宗家にインタビューしたいというオランダの武道雑誌のことを話しましたね？ 大会の前は何回も連絡をくれて、ジャーナリストも写真家も必ず派遣すると言っていましたが、結局来なかったので私はがっかりしました。ただし、大会の直後にまた連絡をくれ、宗家がフランクフルト大会でどんなことを話し手いたのかについて書くように頼まれました。とてもよくできました。その雑誌が先生について本当のことを出したのは初めてですから私達はとても嬉しいです。約束通りには来なかったにしても、結果はとても嬉しいです。インタビューの形を取った短い文章ですが、結構いいと思います。同封いたしますが、内容を日本語に訳すとこのような感じです：

有名な忍術マスター、初見良昭氏が最近稽古ワークショップ（大会）のためにフランクフルトを訪れました。マリエット・ヴァン・デル・ヴリート（武神館道場七段）が初見先生と話しをしてその主だったところを以下に纏めました：

日本の道場にて
後列左から二人目がマリエットさん

初見氏：「実戦では形や覚えた技は重要ではありません。状況に反応することは自分の中から出てくるものです。覚えた技や形は決定的な瞬間には使えないのでどうにもなりません。水泳と同じように、頭で学ぶことはできません、体全体で学ばなければなりません。自分と相手との交流が大事ですが、これは形を捨て去った後でないと学べません。稽古を利用してほかのことも分かるようになることです、技は哲学に基づいています。花のことを心配しないで、まず根っこのことを考えなさい。相手の動きは予測できないから、常識的な物を期待してなりません。だから実戦において武道的な動きをしてはなりません。そんなことをしたら死んでしまいますから。狭いところでも、広いところでも動くことができなければなりません。私がやっているのは動いていないように見えることが多いのですが、それでもちゃんと急所に当たります。右手を使っていると思えば実は左手を使って、その手がダメージを与えるのです。自然の技、自然の力をりようしてください。精神も分かろうとしないと、本当の武道家にはなれません。」

初見良昭氏の武神館に興味のある方は「山脈」という雑誌を購読するか、数多いビデオを少し見るといいでしょう。そして大会に出席することも可能です。初見氏がオランダに来る可能性もあります。詳しい情報の欲しい方は武神館道場に電話で問い合わせてください： 電話番号は０７５１２－７５７３２です。

平成七年度(1995年)宗家セミナーのお知らせ

1）　ニュージーランド大会
2）　バレンシア大会（スペイン）
3）　ツーソン大会（アメリカ）
4）　イギリス大会
5）　日本大光明祭大会

本年度の宗家セミナーのテーマ：　薙刀術
大刀・小刀の捌型
体術（九流派による）

==========

ニュージーランド大会

日程：　１９９５年３月５日（日）

連絡先：　アンソニー・ネッラー
37 Amante Cres
Mairangi Bay
Auckland 10
New Zealand
Tel:　001-64-9-4785543

東京都目黒区中町１－２４－１５
Tel:　03-3711-8362, 03-3714-3173
Fax:　03-3793-9113

TAI KAI - 95
VALENCIA

Dirigido por:
SOKE MASAAKI HATSUMI

FECHA DE CELEBRACIÓN:

29, 30 Abril

1 Mayo

INFORMACIÓN:

BUJINKAN DOJO VALENCIA

SHIDOSHI

JOSE GINER CREMADES

Ing. JOAQUIN BENLLON, 16

D.P. 46006 VALENCIA

ESPAÑA

Teléf. y Fax 96 33 4 01 97.

JAPAN CENTRAL

BUJINKAN HOMBU DOJO

636 - NODA, NODA SMI

CHI - BA - KENT 278 JAPAN

Teléf. 0471 22 20 20

Fax. 0471 23 62 27

Sirva ésta nota, como primera información de éste GRAN ACONTECIMIENTO HISTORICO.

En el cual tendremos el honor de ser dirigidos de el GRAN SOKE DEL NINJUTSU MUNDIAL, Dr. MASAAKI HATSUMI SENSEI.

Imagínate un fin de semana en el incomparable marco de la CIUDAD DE VALENCIA, bañada por sus playas, rodeada por sus naranjos y perfumada por sus flores de azahar.

Y todo ello, entrenando y disfrutando con nuestro SOKE, con su habitual técnica y personalidad arrolladora, con su saber y gran humanidad que traspasa lo natural.

Declarado por el EMPERADOR DE JAPON COMO TESORO VIVIENTE DE LAS ARTES MARCIALES; reconocido y honrando por todos los grandes maestros nipones y de todo el mundo.

- Están previstos Hoteles de 1ª categoría.
- Polideportivo con 500 m de **TATAMI**
- Entrenamiento al aire libre.
- Cena de homenaje a **HATSUMI SENSEI** con espectáculos.
- Cena de Hermandad de la SHILDOSHI KAI MUNDIAL.
- Actividades culturales para acompañantes etc. ...

REMITIR A : JOSE GINER CREMADES. GIMNASIO SHI NER KAN
Ing. Joaquín Benllon, 16
D.P. 46006 **VALENCIA** - ESPAÑA -

Deseo recibir información sobre el TAI KAI VALENCIA - 95

NOMBRE .....
DIRECCION .....
CIUDAD ..... PAIS ..... Teléf. .....

TAI KAI ☐ CENA CLAUSURA ☐ CENA SHIDOSMIKAI ☐
HOTELES ☐ ACOMPAÑANTES ☐

TAI KAI '95
MAY 26, 27, 28
TUCSON, AZ
with MASAAKI HATSUMI

3 DAYS WITH NINPO'S GRANDMASTER
PLUS DEMONSTRATIONS OF OUR MODERN WARRIOR THEME INCLUDING:

- Freefall H.A.L.O. Insertion
- Hostage Rescue Raid
- Nightly Hands-On displays of special operations gear including parachutes, night vision equipment and automatic weapons

Also Featuring:

- Traditional Japanese and American Indian dancers
- Discount tours to the Grand Canyon, Old Tucson and Mexico
- $60 double occupancy rooms in Tucson's Downtown Ramada; includes breakfast for two, airport service and all taxes

---

TAI KAI '95
P.O. Box 11801
Tucson, AZ 85734
(602) 889- 6165

☐ *Yes, please send me a* TAI KAI '95 *brochure*

Name _____

Address _____

_____

Rank/ System _____

Teacher _____

State _____ *Country* _____

Zip Code _____

Hatsumi Soke's U.K. Taikai

28/29/30 October 1995

Stratford-upon-Avon
(Shakespeare's Birthplace)

Cost £150

For further details contact:

Taikai Organiser
Peter King,
P O Box 207,
South Croydon,
CR2 2ZD,
U.K.

武神館東京武道館道場予定表

月	日							
1月	9（月）二	13（金）	16（月）	23（月）大	27（金）	30（月）		
2月	3（金）	7（火）	14（火）	17（金）	21（火）	24（金）	28（火）	
3月	3（金）	10（金）	14（火）大	17（金）	24（金）	28（火）	31（金）	
4月	4（火）	7（金）二	11（火）大	14（金）大	18（火）	21（金）	25（火）大	28（金）
5月	2（火）	9（火）大	12（金）	16（火）	19（金）	23（火）	26（金）	30（火）
6月	2（金）	9（金）	13（火）大	16（金）	20（火）	23（金）二	27（火）大	30（金）

二；第二道場
大；大道場

・道場　東京武道館
東京都足立区綾瀬3ー20ー1　TEL (03) 5697-2111

・交通　地下鉄千代田線「綾瀬」下車徒歩５分

・武神館本部道場事務所　宗家　初見良昭　〒２７８　千葉県野田市野田６３６　TEL　(0471) 22-2020　FAX　(0471) 23-6227
・自主稽古　１７：００～１９：００
・稽古　１９：００～２０：３０
・第二武道場（２F）は素足で使用。

編　集　部
〒２７８　千葉県野田市野田６３６　TEL：０４７１（２２）２０２０
武神館本部道場事務局

編集長　　林　靖之

武神館伝書　「山脈」　第三巻第一号
平成七年二月六日発行　（通算六号）

発行者　初見　良昭
発行所　武神館道場
千葉県野田市野田636　〒278
TEL 0471(22)2020
FAX 0471(23)6227

＊許可なくして複製・転載を禁ず

武神